

String
Fiction Series

11

激情



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

激情

山中與隆

目次

激情

1

編者あとがき

45

激情

山中與隆

1

「おしや辞める」

そういうと智はいきなりチェロの竿を持って振り上げると机の角に裏板の部分を叩きつけた。彼の五百万円のチェロは少し残響のある鈍い音を立てて砕け

散った。妻の麗は声を上げて泣き出した。秋が麗の肩を抱いて寄り添う。匡もあつけにとられて呆然としている。なにしろ止めに入る間もない一瞬の出来事だった。智は砕けた板の破片を見ながら、手に残った大部分の板や弦が垂れ下がっている竿をもったままぼんやり立っている。部屋の中は映像が止まったように動きがなくなつた。

智の発作的な激情を伴った行動は、誰も予想できない些細な、少なくとも周りのものにとつては些細としか思えないことがきつかけだった。この日の練習も、いつものようにお互いにあれこれ気づきを言い合いながら進んでいた。今日は確かに智が注文を付けられることが多めだったことは確かだ。しかし、その時々で四人のうちの誰かが特に多く注文を付けられる役になつてしまふことは珍しいことではない。

お互いそれを容認しながら高めあってきたのである。今日もそのような普段の練習風景とまったたく変ったことはなかった、と少なくともみんなは思っていた。ことのきっかけはこうだった。智が音程のことや、出の遅れのことと何度か注文を受けていた。度重なってくるると智の表情が強張ってきていた。妻の麗はそれに気がついていたが、それもいつものことだったから、また始まったと思っただけだった。それに、

自分の方がよっぽど年がら年中注文を付けられているのに黙ってやっているのに、と頭にきているらしい夫に不満を感じていた。

別の箇所で、智が匡にあるフレーズをもっと強く弾いた方がいいと意見を言った。そのとき匡は、自分はその思わないと智の意見に反対した。

「だけど」

と智がさらに言いかけたとき、さつきから智の態度

を我慢していた麗が、

「自分が言われたからと行って、言い返すみたいに人に文句言わないほうがいいよ」

と言ったのがいけなかった。

「わしだけは言われるばかりで、気がついたことを言っっちゃだめなんか」

と怒り出したのだ。

「そんなこと無いけど。私もさっきの匡さんのとこ

ろ弱すぎではないと思つたけど」

と匡の肩を持つような言い方をした。匡は、

「いや、私もあまり気をつけていなかったから、もう一度やってみましょう。気をつけてみますよ」

と下手に出た。しかし智は、

「もういい」

と言うと、急に立ち上がって、

「わしや辞める」

といつてチェロを叩き割る暴挙に出たのであつた。

練習はもちろんお開きとなり、まだ憤懣やるかたなしといった態度で挨拶もしない智の背中を支えるようにして、麗は泣きながら秋と匡に謝つて辞去した。智の肩には壊れたチェロを収めたケースがかかつていた。泣きながら壊れた破片などを集めてケースに収めたのは麗だつた。

このとき麗と智の大学のサークル以来何十年も続いてきた音楽生活が終わった。

智のこの病的ともいえる苛々と爆発的な怒りは二、三年前から兆候を見せていた。それまで智と麗が属していたグループは、オーケストラから親しいピアニストとのピアノトリオのグループまで大小合わせ八つもあり、たまに頼まれて参加するものも加え

るとそれ以上であつた。しかし、智はことごとく不満の種を見つけては膨張させて、それらを辞めてきた。不満の種と言うのは、必ずしも故なきことともいえませんが、やり過ぎしてもいいのにと思える程度のものだと麗は思っていた。しかし、智が自分の中でどんどんその種を膨らませていくのを見かねて、ストレスが増えるのもよくないと辞めるのを容認してきたのだ。その都度麗も一緒に辞めた。運転をし

ない麗にとつては、練習に参加する脚の問題がついて回っていたのである。無理をすれば自力で練習場まで行けないことはなかつたが、麗自身多少智が言うことに同感できる部分もあつたので、無理に続ける気にならなかつたと言う面もあつたのだ。

次々と辞めて今続いているグループは、今日のカルテットを含めて四つに減っていた。そして今日一つ消えたから残りは三つになつたことになる。しか

し、チェロを叩き割ったのだから、残りの三つも自動消滅である。

何とか落ち着きを取り戻して、自分で運転して智と麗は帰宅した。車の中では智は一言も喋らなかつた。麗が一度だけ、

「今日はいつてもより車が少ないね」

と言ったが、智は返事をしなかつた。それでも二人

は行きつけのファミレスによつて夕食をすませて帰った。

その夜中、眠っている麗が気づかないように寢床をこつそりと抜け出した智はマンションの九階から飛び降りた。

智の葬儀は本当に家族だけでひっそりとすまされ

た。ただ匡と秋だけは参加した。麗の衝撃は大きく、匡と秋の懸命の励ましによつてもなかなか立ち直ることにはできなかつた。智が、病で逝つたのではなく心の闇に導かれるように死んでいったことが麗の苦しみを計り知れない大きさにしていた。

匡と秋はしばらく麗をそつとしておくことにした。それでも麗が一人でどう暮らしているか心配になつて、秋は時々電話した。それまではメールでのやり

取りがほとんどだったのだが、秋は実際の声を聞かないと安心できなかつたのだ。

三ヶ月したころ匡と秋は車で麗を迎えに来た。半ば無理やりに麗を自分たちの家に連れ出しに来たのだ。誘い出すために部屋に入った匡たちは、電話の声からも想像はできていたのだが、麗の部屋が予想に反してこぎれいに維持されているのを見て安心した。

匡たちは、あまり気乗りしない麗にどうしても楽器を持ってくるように強いた。

事件以来初めて音楽室に入った麗は、あのとこのことを思い出したのかやや青ざめて、頬に鳥肌が立ったような表情で立ち尽くし、やがて麗の頬を大粒の涙が流れ落ちた。秋は、まだ早すぎたのかと後悔したが、麗はそれ以上取り乱すこともなかった。三人は楽器を取り出した。

「あとでチェロの純ちゃんが来ることになっているからそれまで三人でやってましよう」

と、いって、ドヴォルザークのミニアチュアの楽譜を配った。秋がファーストバイオリンでメロディを弾き、セカンドバイオリンの麗とビオラの匡が伴奏パートを弾いた。三人はこの美しいメロディのカヴァレティーナを何もいわずに三度繰り返して弾いた。ゆったりと起伏する美しいメロディはいやがうえにも

三人の心を揺さぶる。メロディを弾きながら秋の頬を涙が伝った。あとの二人も同じ気持ちなのか何もいわずに弾き続けた。

「麗さん、メロディ交代しましょう」

と、秋と麗は楽譜を交換した。麗はいわれるままにそれに従った。それ以外、三人ともあまり言葉をお互いになかった。話をすると胸がいっぱいになりそうだったのだ。

こんどは麗がメロデイを受け持つて弾き始めた。始まつてすぐに麗は声を出して泣き出してしまつて演奏は中断された。麗は、この曲にはチェロの出番がないにもかかわらず智はとても好きで、家でもよく聞いていたことを思い出したのだ。もちろんこの場に智がいないことの方がもつと麗を悲しい思いにさせていた。秋と匡はしばらく麗をそうさせたままにしていたが、やがて落ち着きを取り戻した麗は、

「すみません」

と、いって楽器を構えなおした。三人は初めからもう一度弾いた。麗は感情を押さえ込まない抑揚の大きな演奏をした。伴奏の秋と匡もそれに従うような高揚した演奏をした。彼らは同じこの曲を麗のメロディで四回も繰り返した。

「少し休憩しましょうか。そのうち純ちゃん来ると思うから」

と秋が促して、休憩のお茶になった。休憩のお茶には、秋たちが準備した茶菓子と紅茶が出た。麗が、
「一人足りない感じですね」

といったので、匡と秋はまた湿っぽくなると気にしたが、もう麗は泣いたりしなかつた。しかし、いつも四人でいるいろんな話題が盛り上がっていた場が、なんとなく穴が開いた感じは否めなかつた。ぼそぼそと話が続いているとき、玄関のチャイムが鳴って

純ちゃんがやってきた。純ちゃんは三人と似たような世代のアマチュアチェリストで、過去にシューベルトの弦楽四重奏にチェロをもう一本加えた編成の五重奏曲をしたときに一緒に弾いたことがある。純が加わってお茶の時間はさらに長々と続いた。

「そろそろ弾きましようか」

匡が待ちかねたようにいって、四人は音楽室に戻った。

「何かからしまししょう？モーツアルトの四九九？」
匡がいった。四九九とは、モーツアルトの弦楽四重奏曲第二〇番のことで、ケツヘル番号が四九九番である。これは智がチェロを叩き割ったときにみんなで練習していた曲だ。匡はあえてこの曲を持ち出して、智ではないチェリストと弾くことで、麗から智の影響を消せないかと思つていったのだが、いつてすぐにしまったと思つた。麗がすぐに、

「モーツァルト以外がいい」
と云ったからである。

結局四人はベートーヴェンの作品一八を弾くことにした。智ではなく純のチェロで四重奏をするのはこのメンバーにとって初めてだった。純のチェロは、智の暖かく深みのある音とは違って、良くいえばきびきびとして歯切れがいい。秋の音もどちらかというとうと歯切れがいいので、秋と純の音は良く合う。内

声の麗と匡は比較的やわらかいよくハーモニーする音色で、これは智の音ともよく合っていた。しかし純の入ったアンサンブルは、これはこれで悪くなかった。新しいメンバーによる四重奏でベートーヴェンを三曲弾いてこの日の練習を終え夕食となった。この日は麗も純もここに泊まっていくことになった。新しいメンバーの純が入ったことで、食卓の話題はこれまでより新鮮味が加わった。

その夜、麗は純と同じ部屋に寝た。二人は深夜まで話し続けた。実は純も三年前に夫を交通事故で亡くしているのだった。自宅から十分もかからないところに用足しに行つたときに、出会いがしらにトラックと正面衝突して命を落としたのだ。そのようなことをまったく予想していなかつたときに、警察からそのような連絡が入つたときの事を純は麗に話した。それだけでなく純の落ち込みは深く、実は純が

演奏に戻ったのはこの日が事故後初めてだといふのだ。匡と秋はこのような二人を意図的にめぐり合わせた。夫を失った状況は二人とも衝撃的であつたが、その時期は大きく違っている。夫の死後僅か三ヶ月で蟄居していたところをなかば強引に合奏に誘われた麗と、三年間楽器に触れることもなく、というより楽器を弾くことを辞めてしまったような純とでは、状況はかなり違つていた。しかし二人は自分の人生

を取り戻すことについては共通していた。あるのはただ、自分の生きがいを取り戻すかどうかということとである。二人は夜が白むころまで、長年連れ添った夫への喪失感、その後襲われた無気力感、底なしの寂寥感をそして、秋夫妻によつてもたらされた今日一日の充実感を語り合つた。

翌日遅い朝食を済ませた後、四人は次回を約束して麗は純の車で帰宅した。純の住まいはさらにその

先にあるのだった。だから次回は純が麗を拾って、くという段取りまで好都合に出来ていた。

麗はその日何かと滞っていた家事をかたづけ、自分ひとりのための夕食を作り、一人でそれを食べた。この三か月間そうしてきたのだが、昨日午後から今朝までの短い賑やかな時間を経ただけなのに、麗にとってのはたった一人の時間がどうしようもなく孤独

であつた。そのためにすっかり眠れなくなつた麗は、夜遅く寢床から出て、夫が飛び降りた玄関前の手すりのところに立つてみた。遙か真下のアスファルトが街灯に照らされて鈍く光っている。麗は長い時間同じ姿勢で真下を見ていた。そうしていると吸い込まれるような感覚に襲われるのだつた。夫ももしかしたらこのような感覚に襲われて飛び降りてしまつたのかも知れない。麗は、身体が手すりを離れてか

ら何秒くらいでアスファルトに叩きつけられるのだらうと想像した。その短い時間に何を考えたのだらう。麗は、夫がしばしば発作のように襲ってくる錯乱した激情から逃れたくて死を選んだと考えていたが、もしかしたら何も考えずに、ただここから吸い込まれるようにして死んでいったのではないかと思えてくるのだった。麗はどれくらいそうしていただらうか、寒くなつて身震いして我に返つた。寢床に

戻った麗は、いつまでも遙か下のほうに鈍く見えて
いるアスファルトが脳裏から離れなかつたが、いつ
の間にか眠りに落ちた。

麗は久しぶりに熟睡した後のような爽快な朝を迎
えた。朝からてきぱきと家事を片付け、秋にお礼の
メールをうち、久しぶりに、本当に久しぶりに楽器
を開いて練習をした。さらに午後には近所の体育館
に出かけて行って周回コースを一時間半近くも歩い

て快い汗を流した。約二週間後の練習日を待ちわびながら、麗はそのような日課を続けた。体調も、この三ヶ月間に比べると信じられないくらい良かった。

約束の日の昼過ぎ、純が前回と同じブルーの軽自動車で麗のマンションの前にやってきた。麗は時間を見計らってマンションの前まで出て待っていた。麗は今日が待ちきれないくらい楽しみだったことや、自分でも信じられないくらい活発な気分になれたこ

とを純に話した。そしてこの日の夕食にみんなで食べるために一品作ってきたことも話した。

純は、麗とは少し違っていて、三年の間楽器を弾かなかつたブランクが大きく、練習をしても以前のようには弾けないので悩んだことを話した。そして、この年齢になっても元に戻るのか心配だといった。前回のとき純は結構上手く弾いていたと思っていた。麗は、そんなことはまったく心配に及ばないといっ

たが、純はそうは思っていないようであつた。

この日の合奏も、十分に楽しいものであつたが麗は、二週間の期待があまりにも大きく膨らみすぎていたために、前回ほどの新鮮さは感じられなかつた。

こうして四人の合奏は、月に二回ほどのペースで順調に続いていった。ところが二年目の冬、匡が突然体調を崩し入院してしまった。原因不明の高熱が続

きあつという間に死んでしまった。体調がよくない
といいだしてから僅か五日目のことだった。

気丈な秋は葬儀が済んだ翌週に、予定していた合
奏日を予定通りに実施しようといった。麗と純は驚
いたが、秋を励ます機会と思い集まることにした。
秋は、いつもより盛大に晚餐をしようという。いろ
いろ話すうちに、今回は特別に三日間連続の合宿に
しようということになった。合宿といってもいつも

の秋の家が会場である。三人はメールで三日間のメ
ニューをやり取りした。だが三日間も弾く曲につい
ての相談は誰からも出なかった。だいたいビオラの
欠けた四重奏団である。練習する曲といつても探さ
なければ無い。

しかし、約束の日が三日後に控えたとき秋は麗と
純にビオラのいい人が見つかったとメールしてきた。
メールに簡単に書かれた紹介によると、もう十年來

未亡人としてやってきた同世代の人で、現在も地元
の弦楽合奏団でトップをしているということである。
名は夏だそうだ。夏も今度の合宿にフル参加すると
もあつた。

四人は定刻に秋の家を集まつた。こうして秋、麗、
夏、純の四人によるほぼ同世代の未亡人カルテット
が誕生した。四人はお茶を飲む間も惜しんで早速合

奏を始めた。夏は現役で若いメンバーの多い合奏団のトップを務めているだけあって颯爽と弾いた。彼女に引っ張られるようにして次々と楽譜を引っ張り出しては合奏した。秋は夫匡の死を嘆く暇もなく、活発な合奏の中に突入した感じであつた。独立した女四人の合宿の三日間は瞬く間に過ぎた。そして四人は無謀ともいえる大きな挑戦の約束を交わした。これから半年くらい猛練習をして、定期的な弦楽四

重奏の演奏会を開こうというのである。プロでもなかなか成り立たないそのような企画はむちゃだという意見も出たが、この際熟年の未亡人パワーを見せつけようという勢いでスタートすることが決まった。毎週一泊二日で合奏練習をし、その間はそれぞれ個人練習をする。月に一回は四重奏のレッスンを受けることにした。それに必要な個人の技術を高めるために、現在個人レッスンを受けていない麗と純も個

人レッスンを受けることにした。純は四重奏のレッスンを受ける先生に個人レッスンも受けることになった。そのようにして半年で六曲のレパートリーを作る事が目標であつた。

同世代の未亡人四人という組み合わせは、ことのほか上手くいった。それには四人とも家族などの問題もなく、健康にもいまのところ恵まれていることが幸いしていた。

半年の熱い準備期間は瞬く間に過ぎた。一応六曲のレパートリーも何とか仕上がった。仕上がったというのはいさしい過ぎかもしれない。強いていえば彼女たちとしてはまあまあ水準になったといつたほうがいいかも知れない。いずれにしても、それこそ四人は寝食を忘れたように練習に打ち込んできた。その結果は、それぞれがアマチュアの愛好家として長年やってきた水準からは想像できないくらいこのレ

ベルに達したといえるだろう。

演奏会は無料で行われるが、チラシを作つて広く宣伝はした。第一回には二百五十ほどの席がほぼ埋まるくらいに聴衆が集まつた。まずはハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲を一曲ずつとりあげたプログラムである。メリー・ウイドウ・カルテットとして地元紙も取材に来た。これには秋の政治力もあつた。

盛大な拍手の中、アンコールに次回予定曲の中から一つの楽章を演奏して終わった。

完

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 11

激情

2022年11月10日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

<https://www.ac-illustr.com/>

・タイトル：弦楽器グラデーション

作者：t-dunさん

イラストのID: 2610321

・タイトル：花のフレーム2(黒)

作者：猫エンジンさん

イラストのID: 1587380

<https://www.silhouette-ac.com>

・タイトル：譜面台

素材のID: 105365

・タイトル：譜面台

素材のID: 105366

<https://www.photo-ac.com>

・タイトル：チェロ

作者：r*****mさん

写真のID: 3669919

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
